



奈良文化財研究所創立 50 周年記念 事業を振り返って

2002年4月、奈良文化財研究所は奈良公園の春日野に産声を上げてから50年目を迎えました。2,3年前から創立50周年記念行事について所内で話し合って参りましたが、準備を整えいよいよ実行の年を迎えることになったのです。所員一同大いに張り切り、それぞれの部署において役割分担を果たしました。

高松塚古墳の発見を機会にしておこなわれた『飛鳥展』以来、30年振りに開く『飛鳥・藤原京展』に関する準備は大変で、これまでの発掘成果を点検整理するとともに歴史的な解釈をほどこすという難事を経過せねばなりませんでした。展覧会の会期にあわせて「東アジアの古代都城」と「古代建築研究の新たな展開」という二つの講演会をおこないまし



東京都美術館での『飛鳥・藤原京展』開催挨拶

た。前者は中国・韓国の専門家を招いての国際研究会であり、奈文研とは日頃なじみの薄い東京会場でおこないました。記念の出版物として『山田寺発掘調査報告』『文化財論叢Ⅲ』『平城京条坊総合地図』をすでに刊行して参りましたが、その他にも準備しているものがあり目下印刷中という状況です。

こうした記念行事については、その都度『奈文研ニュース』に報告しているので改めて述べませんが、いずれも各界の好評を得たうえ、所員の努力が高く評価されたことを付け加えておきます。

展覧会・講演会・報告書の刊行という3本柱の事業を短期間の内に進め、おおむね大過なく終了段階を迎えておりますが、日常的な研究事業に加えて各種の催し物をこなすことでいろいろなトラブルも生じ、所員にとって重荷になりましたが、成果を目の前にすると疲れも吹っ飛んだようです。このようにして、奈文研の職員は50年間にわたる研究成果を何らかの形で総括したわけですが、奇しくも国立の研究機関から独立行政法人の研究機関へと移行するときの節目に遭遇したのでした。

奈文研は2001年に独立行政法人文化財研究所の1部署となり現在3年目に入ったところですが、研究事業に対する企画立案・計画・実施などそれぞれの局面で従来とはかなり異なった手法を取り入れ、研究内容についても大幅に改善してきました。中期計画にもとづく研究成果についてはこれまで以上に厳しい評価を受けております。当然のことながら、2002年度に創立50周年としておこなってきた数々の研究成果を土台にして、研究機関と個人の研究のさらなる飛躍・発展が期待されている状況をひしひしと感じる昨今です。

(奈良文化財研究所長 町田 章)